

# 学力向上拠点形成事業（高等学校）報告書

平成 18 年度～20 年度



「共育」クローバープラン

長野県教育委員会

## はじめに

学力向上拠点形成事業は、平成18年度から平成20年度までの3年間、文部科学省から「確かな学力育成のための実践研究推進地域」の指定を受け、県立高校5校を実践研究推進校とし、実施してまいりました。その趣旨は、学習指導要領のねらいである生徒の「確かな学力向上」のため、推進校が生徒の実態に応じて行う授業内容や指導方法の改善・充実、大学や中学校等との連携などの実践研究を支援するとともに、その成果の普及や継続的・発展的な実践の在り方などについて研究し、県内高校生の学力や学習意欲の向上を図るということでございます。

本事業を円滑に実施し、推進校における実践研究の成果の普及を推進するために、「長野県学力向上推進協議会」を設け、3年間にわたって協議を重ねてまいりました。

また、各推進校でも、それぞれの取組を推進してまいりました。この結果、例えば、「自ら学習に取り組む姿勢の定着が見られた」、「NPO法人や企業、大学と連携することで、学びの幅が広がった」、「地元の産業界等との連携の強化により、地域からの信頼が更に深まった」など、各推進校の取組から成果を見出すことができました。その中で、本事業を通じて、各推進校の先生方には熱心なお取組をいただいたわけですが、先生方の間に学力向上への意識が一層高まったことや、開かれた学校づくりが進んだことが、大きな成果としてあげられると思います。

本書は、学力向上拠点形成事業における実践研究の成果を県下の高等学校に普及するために、各推進校の取組を中心に作成いたしました。それぞれの推進校の特色を生かした取組は、県下の各高等学校の参考になるものと考えております。本書を御活用いただき、各学校が創意工夫して、確かな学力の育成に向けてさらに取り組んでいただくことを期待しております。

平成21年3月

長野県教育委員会事務局教学指導課

課長 赤羽 健次

# 目次

はじめに（教学指導課長）

学力向上推進協議会の成果を長野県全体に発信する（推進協議会会長 山崎保寿）・・・ 1

長野県の学力向上の取組（教学指導課）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

## 実践研究推進校の取組

I 中野西高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

II 軽井沢高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

III 駒ヶ根工業高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

IV 飯田高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

V 松本深志高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

学力向上推進協議会委員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

## 学力向上推進協議会の成果を長野県全体に発信する

長野県学力向上推進協議会 会長 山崎 保寿

### 1 各学校で平均学力の向上を目指すことが重要

長野県学力向上推進協議会では、研究推進校の教頭5名および学識委員5名の計10名に教学指導課事務局を加えたメンバーが、3年間にわたり学力向上のための協議を行ってきた。研究推進校の実践報告に基づいた毎回の協議により、平均学力の向上を果たすための方策が、次第に明らかになってきた。つまり、平均学力向上の具体的方策として、スタディサポート週間の設定、オリエンテーション合宿、家庭学習重点化週間、学習状況調査とその活用、定点観測的テストの毎年実施、学習合宿、進学補習などである。そのほか、学校設定科目の工夫、学校だよりの効果的発信、校長講話の意図的活用なども有効である。

それらの方策を改めて整理すると、(1)生徒の学習実態の把握、(2)生徒の実態に合った教材の開発と活用、(3)教員の指導力(授業力)の向上と授業改善、(4)生徒の学びへのモチベーションの高揚、(5)生徒の家庭学習時間の確保、に集約される。これらは、いずれも、各研究推進校が実践している中から、効果的と考えられる方策を集約したものである。重要なことは、これらの方策を単一的に取り入れるのではなく、学校の実情に応じて組み合わせたり、複合的に取り入れていくことが大切である。

#### (1) 生徒の学習実態の把握

学力向上に向けた諸方策を推進する場合の基盤として、生徒の学習実態の把握が不可欠である。入学時基礎力テスト、定期試験、校外模試等を通じて、生徒の学力の状況を的確に把握することである。特に、経年変化を詳細に分析し、当該学年の学習に関する問題点を迅速かつ的確に把握することが重要である。試験以外の方法として、生徒の生活や学習に関する実態調査、意識調査も時期を定めて実施したり、学習週間、スタディサポート週間の設定や家庭学習日誌の指導などが有効であることが明らかにされた。

#### (2) 生徒の実態に合った教材の開発と活用

現在の生徒たちは、学習の仕方や好み、学習の傾向が以前とは変わってきているので、それを的確にとらえた指導が一層必要である。生徒の学習状況を的確に把握したうえで、生徒の実態に合った教材の開発と活用が重要になる。具体的には、中・高ブリッジ教材の作成、補習テキストの作成、総合的な学習の時間テキストの作成、小論文指導等の系統化・冊子化など、自主教材の作成である。学力向上推進協議会の協議でも、生徒の実態に合った生きた自主教材を活用することで、生徒と教師の距離を縮め授業改善を図ることが重要であることが分かった。自主教材の活用や生徒と教師の距離を縮める授業改善によって学びの質を高めていくことが重要になる。

例えば、軽井沢高校が実施しているような探求的な学習を行ったり、大学との連携を取り入れた合同調査へ生徒を参加させるといった方法は参考になる。また、駒ヶ根工業の資格取得の指導や「VIEW」の活動を通じて、生徒の学習意欲を喚起したり、将来の進路について明確な目標を持たせたりしていくことも有効である。さらに、松本深志高校が実施しているように、中高連携を今まで以上に充実させて、進学校に相応しい形態によって中学校と必要な連携を取りながら入学志望者に学習への意識づけを行っておくことが重要である。

#### (3) 教員の指導力(授業力)の向上と授業改善

授業改善の前提として、学習指導要領改訂による新教育課程が実施されたことから、中学校教科書における削除・移行に関する研究が必要である。そのうえで、中学校との連絡協議会の実質化、地元

中学校との情報交換会や教科研究会の実施など、中学生の実態把握に基づいた学習指導を行うことである。シラバスの充実、生徒による授業評価の実施と授業へのフィードバック、研究授業や授業公開、日頃の授業互観、県内外の学校視察、研究授業参加などによって授業改善を進めることである。また、それらの結果を、校内研修で生かし、学校全体で教師のディレクション能力（指揮・指導力、方向づけの力）を伸ばすことが重要であることが分かった。生徒の平均学力向上を図るには、その前提となる教員の指導力の向上が不可欠であるといえる。

#### (4) 生徒の学びへのモチベーションの高揚

生徒の学びへのモチベーションを高めるためには、発達段階に応じた学習への興味づけや動機づけが必要である。そのために、まず、高校入学時における丁寧な初期指導を行い、高校生活への不安を解消し、前向きな学習姿勢を作らせることである。そして、シラバス記載内容に関する一層の工夫改善、自主教材による興味の喚起、学校独自の学習の手引や進路の手引に基づいた指導などを行うことである。シラバス記載内容の工夫として、例えば、「この授業で生徒に求めること」、「生徒に特に学んでほしいこと」、「評価で重視すること」、「先生からのメッセージ」、「質問時間の設定（オフィスアワー）」等を示すことも効果的である。

もちろん、各学校においては、充実したシラバスや学習の手引、進路の手引などを作成しておくことが、こうした指導の前提として必要である。その他、生徒に将来への進路展望を持たせるために、総合的な学習の時間を活用したゼミ形式の課題探究的活動、キャリア教育の観点に立った進路探求的活動やインターンシップ、大学の出前講座や高大連携事業、オープンキャンパスへの参加などが有効であることが分かった。総合的な学習の時間を活用したゼミ形式の課題探究的活動は、学力の質を高めるうえでも重要である。

#### (5) 生徒の家庭学習時間の確保

生徒の家庭学習時間を確保するためには、家庭との連携のもと、面接週間やスタディサポート週間の実施、生活実態調査の実施、家庭学習定着旬間の実施などが考えられる。進路に対する動機づけが、家庭学習との好循環を生むように、進路ガイダンスとカウンセリングの組み合わせと工夫改善、総合的な学習の時間を活用したキャリア教育の推進、キャリア・カウンセリングの導入などが有効であることが分かった。

以上が、各学校で取り組むべき平均学力向上のための方策である。各学校では、長野県教育委員会の支援のもと、これらの方策を複合的に取り入れ、それを重点化し、学力向上の取り組みを推進することが今後の有力な方向になってくる。そうした意味で、教育委員会が推進している「伸びる力養成講座」、「優秀教員の表彰」などの事業も、対象となった生徒や教師の範囲内の情報に止めず、その成果をできるだけ速やかに県内全体に広め、県全体として平均学力の向上につなげていくことが鍵であるといえる。

## 2 全人教育の充実と個別指導の強化が鍵

### (1) 全人教育の充実

学力向上を目標とする場合であっても、全人教育が青年期教育の基本として重要であることを忘れてはならない。学力向上推進協議会の議論においても、全人教育や魅力ある個人の育成など、青年期教育の基本となるところをはずしてはならない、ということが指摘された。例えば、クラブ活動、生徒会活動、学校行事など、友人や先輩・後輩との人間関係を伴う活動にも生徒が十分取り組める環境を保障することが重要である。

学力向上を目指すためには、その基盤として学校力の向上が重要である。ここで、学校力の中には

「生徒力」も含まれているのであり、部活動とか文化祭等への取り組みの力という「生徒力」も重要な要素である。そうした全人的な力を伸ばしていくことに意を注いでいくことが重要である。そうでないと、学力向上の目的が進学指導のみに特化してしまい、高校生という青年期の多感な時期に狭い人生観に偏る恐れもある。進学自体は非常に重要なことであるが、同時に生徒の健全な発達を保障することもいろんな意味で重要である。

## (2) 多様な学びの保障

全人教育の観点を敷衍すれば、「生徒の自立をいかに図るか」が重要である。現在、社会が激しく変化する中で、生徒の生育歴全般において、自然体験が乏しい、人間関係が希薄、コミュニケーションが不十分などの問題が指摘されている。高校においても、こうした問題を踏まえ、時代に合わせた生徒の自立の在り方を考えることが必要とされている。それゆえに、生徒の自立につながる「多様な学びの保障」が重要になってくる。

そのため、キャリア教育や中高大連携など多様な学びの機会を通して、生徒が自分の将来像を描くことができるようにしていくことが重要である。ただし、こうした取組は、時が経つと形骸化していく傾向があるので、他校の良い面を積極的に取り入れていくことも必要になる。例えば、現在、多くの高校で大学見学を実施しているが、生徒が大学を見学・訪問するだけでなく、大学の授業を実際に体験してみる「ミニ大学講座」などに発展させることも考えられる。その場合は、大学の先生を招く企画を実施したり、大学の公開講座へ参加させるなどの機会を作ったりする必要がある。また、そうした活動で生徒が書いた感想を、保護者や大学側へ発信していくことも有効である。

## (3) 生徒の学習支援として個別指導の強化を図る

全ての生徒の学力を保障する観点に立てば、今後はさらに個々の生徒に対する指導の個別化を図っていくこと、すなわち、多様な生徒の個々の特性に合わせた指導形態をどれだけ取り入れることができるかが鍵になる。本来、学習指導は、個別指導と全体指導から成り立つものである。入学当初は全体指導が主であるが、ある程度学習が進むと、進度の違いが生じたり、分からないことが増えたり、授業に興味を持たないなど、生徒の個別の状況にどう対応するかが重要になってくる。指導の具体化、個別化がこれからの大きな課題である。

個別の対応が十分にできてくると、それを踏まえた全体指導がさらに良い形になる場合が多く、個別指導と全体指導が相互作用的に繰り返され充実していくといえる。したがって、個別化の観点で、学習指導を一度点検しておくことが重要である。例えば、飯田高校が実施したアンケートのように、個々の生徒の詳しいアンケートが個人情報に配慮したうえで他の生徒の目に触れることで、自分と同じような考えの生徒がいることとか、他の生徒の考えに触れることができるようになっていく。中野西高校の進路シラバスのように、基本的には全体指導に使われるものであるが、個々の生徒においても、3年間の進路指導を見通して、自分の進路計画を立てられるようになっていく。このように、全体指導の充実が目をつけるだけでなく、個別指導を綿密にすることで、学習支援を強化することが重要である。

## 3 今後の発展を目指して

### (1) 学力向上を目指した指導の継続と重点化

学力向上への動きを実質化させるためには、これまでの継続してきた取り組みを学校の特色として定着させていくことが大切である。学校の特色がはっきりしている方が、それが曖昧な場合に比べ、生徒の参加意識、学習に対する取り組みは当然向上するからである。自校で継続されている内容を、教職員が「特色」として共通認識を持ち、地域連携の際にも特色として広めていくことが重要である。

学校の継続的取り組みが、特色として意識化されることが大事で、そのためには、常々、校長・教頭先生がいろいろな場で口にししたり、パンフレット、学校だより等で紹介し、それを職員、生徒、保護者に認識してもらうことが非常に大切ということになる。

例を挙げると、中野西高校では、報告書の内容が3つの研究内容として明確に示されている。駒ヶ根工業高校の場合も明確な計画が示されている。こういった明確な示し方をするためには、重要度の高い内容を取捨選択したり、今後重要になる内容に力点を置くことが必要になる。学校の教育方針とも関連して、継続している効果のある指導を学校の特色として重点化することが校長・教頭の大事な役割になる。

## (2) 外部資源の活用と連携の強化

今後の重点事項の一つとして、外部連携の強化が挙げられる。すでに、軽井沢高校、中野西高校、駒ヶ根工業高校、松本深志高校、飯田高校の推進校すべてで様々な形で外部連携を実施している。NPOとの連携、中学や大学との連携、民間との連携、公共機関との連携など、そうした形態は新しい学習をもたらすとともに学習の幅を広げ、生徒の意欲向上にもつながる可能性を持っている。常に同じ教室で同じ先生に教えてもらうという学習形態が、必ずしも時代に合わないという面が見られるようになってきている。

特に、高校で学んだことがいかに社会と結びついているのか、あるいは、現在の学習が将来進学する大学の学問とどうつながっているのか、ということを生徒が実感として知る機会を作っておくことが望ましい。そこで、実際に大学の先生に来ていただいたり、自分が大学へ行ったりして、肌身で感じて理解していくという幅の広い学習形態が重要になっている。そのためには、中野西高校が実施しているように、中学校との連携において互いのカリキュラムを検討し、研究授業の時期を合わせていくといった詳細なレベルでの相互協力も必要になる。今後は、外部にある人的・物的資源を有効に活用することが重要である。

## (3) 教員研修の充実—教師力から学校力へ—

生徒の学力を向上させ、そのための授業改善を支える力となるのは、つまるところ教師の力であるので、教師の力を伸ばす教員研修を充実させていくことが最終的に大切である。教員研修は、どの高校でも実施しているが、軽井沢高校では、明確に「学力向上と本校の方向」という教職員研修を目指していることが報告された。飯田高校では、職員会の前に短時間の情報交換会を意図的に設けていることが報告された。駒ヶ根工業高校で行われているように、専門が違っても教師同士が学び合いを深めていくという教員研修の方法が参考になる。一人ひとりの教師力を学校全体の学校力へと高める工夫が大切である。

教員研修によって、進学校の指導のノウハウを地域校にも広めることが重要であり、長野県全体として、「地域高校が参加できる学力向上」を目指すことが大切である。授業を公開する際には、保護者にも情報を発信するとともに、近隣校へも必要に応じて参加を呼びかけるといった工夫をしたいものである。

授業改善と授業研究は、義務教育の状況に比べて高校では乏しいと言われている。しかも、義務教育では、小学校6年生と中学校3年生に対して、平成19年度から全国学力調査が始まっているので、今後はさらに学力向上に向けた授業改善が進むと予想され、高校もそれに相応した授業研究や授業改善が必要になってくる。今後は、高校においても学力向上の有効な方策を目指した教員研修の充実が一層必要になる。

## (4) 難関大学への進学を目標にした指導を導入する

上記した平均学力向上のための方策を踏まえたうえで、個々の生徒の目標や、地域における学校の

位置や役割を考えると、難関大学への進学を目標にした指導を導入する必要もある。学力向上推進協議会においても、特に学校外の委員から、難関大学を目指した明確な達成目標や数値目標を設定することが必要であるとの意見が強く出された。

そのためにも、まず、各学校は、個々の学校の置かれている位置、社会的使命を明確にすべきである。そのうえで、明確な学力目標を設定し、個々の生徒に応じた学力保障を行うことが必要である。難関大学への進学率向上は、今後も開発の余地が大きいといえる。



## 長野県の学力向上の取組

### 教学指導課

学力向上拠点形成事業に当たって、教学指導課では、推進校の研究の支援とともに、「確かな学力向上」のため県として取り組んでいる事業を推進し、長野県学力向上推進協議会で、推進校の取組と県としての取組について協議し、県全体としての「確かな学力の向上」のための実践の在り方について研究してきた。その概要は以下のとおりである。

#### 1 県の取組

##### (1) 学力向上推進事業の推進

県内各高校における、学習習慣形成合宿、高大連携講座、進路情報の活用、進学対策集中講座等に県として支援している。

##### (2) 「伸びる力養成講座」の開講

生徒の学習意欲の向上と教員の指導力の向上のため、平成18年度に「伸びる力養成講座」を立ち上げた。

##### (3) 『『ずく出せ修行』就業体験』の充実

平成15年度から実施している『『ずく出せ修行』就業体験』は、キャリア教育の一環として位置付けているが、参加する生徒を増やすことで一層の充実を図った。

##### (4) 「生活・学習意識実態調査」の実施（平成18年度）

小・中学校と一緒に実施をし、分析結果をリーフレットにし県内の高校に配布するとともに、県教育委員会のホームページに掲載した。

##### (5) 研究授業の推進

研究授業の機会を増やすよう取り組んできた。また、県内の各高等学校の研究授業の日程を、県教育委員会のホームページに掲載し、研究授業を校内に限らず、できるだけ校外に広く開放することを推進した。

##### (6) 「長野県学力向上推進協議会」の開催

##### (7) 「進路指導等研究協議会」における講演

長野県学力向上推進協議会学識委員から、本事業を踏まえて、全県の進路指導主事を対象に毎年、講演していただいた。（18年度：向田久美子氏、19年度：土屋龍一郎氏、20年度：寺澤順子氏）

#### 2 研究の実施体制等

本事業の担当と学力向上事業全般の担当とが連絡をとりながら、また、義務教育の「学力向上フロンティア拠点校事業」の担当と情報交換をしながら、学力向上推進協議会を中心に推進校と県の情報をそれぞれ共有し、本事業を推進してきた。

### 3 「学力向上推進協議会」について

#### (1) 平成 18 年度

##### ① 担当者会議 平成 18 年 8 月 3 日 (水)

- ・参加者：長野県学力向上推進協議会委員の内、学校委員及び事務局委員
- ・推進校の実践研究の在り方とここまでの進捗状況の確認

##### ② 第 1 回長野県学力向上推進協議会 平成 18 年 11 月 2 日 (木)

- ・学力向上拠点形成事業の事業内容の確認
- ・推進校の取組状況及び県の取組状況の報告
- ・推進校の取組状況及び学力向上全般について協議

##### ③ 第 2 回長野県学力向上推進協議会 平成 19 年 2 月 9 日 (金)

- ・高校生の学力向上について学識委員（伊藤稔氏、田中直子氏）から提言
- ・推進校及び県の本年度及び次年度の取組についての報告と協議

#### (2) 平成 19 年度

##### ① 第 1 回長野県学力向上推進協議会 平成 19 年 8 月 31 日 (金)

- ・高校生の学力向上について学識委員（土屋龍一郎氏、向田久美子氏）から提言
- ・推進校及び県の取組状況の報告
- ・推進校の取組状況及び学力向上全般について協議

##### ② 第 2 回長野県学力向上推進協議会 平成 20 年 2 月 5 日 (火)

- ・高校生の学力向上について学識委員（山崎保寿氏、寺澤順子氏）から提言
- ・推進校及び県の本年度と次年度の取組について報告
- ・推進校の報告について協議

#### (3) 平成 20 年度

##### ① 第 1 回学力向上推進協議会 平成 20 年 7 月 10 日 (木)

- ・授業参観（松本深志高等学校）
- ・推進校及び県の取組状況の報告
- ・推進校の取組状況及び学力向上全般について協議

##### ② 第 2 回学力向上推進協議会 平成 20 年 10 月 27 日 (月)

- ・県の取組状況の報告
- ・学力向上全般について協議

##### ③ 第 3 回学力向上推進協議会 平成 21 年 2 月 20 日 (金)

- ・推進校の成果と課題について報告
- ・本事業のまとめについて協議

# 実践研究推進校の取組

## 1 中野西高等学校

### 1. 研究の概要

- (1) 主体的な進路選択を実現するためのキャリアガイダンスのさらなる充実
- (2) 中高大連携による学習指導の充実
- (3) 生徒の実態に即した学習指導方法・授業の改善

### 2. 研究の成果

#### (1) 主体的な進路選択を実現するためのキャリアガイダンスのさらなる充実

- ・資料の更新によって指導全体がより有機的に関連づけられ、職員は体系性を意識した指導を心がけている。
- ・将来設計まで見通したものが進路という考えは、生徒にも浸透してきた。
- ・大学見学、進路ガイダンス、ジョブナビなど職員と生徒の手作りによる企画の積み重ねが全体の意識向上を支えている。

#### (2) 中高大連携による学習指導の充実

- ・各教科の教材についての中高大のとらえ方の違いを確認できたこと。
- ・職員が中学校・大学との連続性を意識した指導を心がけるようになってきたこと。
- ・複数教科の研究会を継続して持つことで中高大の繋がりが生まれてきていること。
- ・授業研究会を持たなかった教科もレポートを作成し、学校全体としての取り組みとしている。

#### (3) 生徒の実態に即した学習指導方法・授業の改善

- ・生徒への具体的なデータを示しての指導が徹底し、進路実現に繋がっている。
- ・生徒の授業評価の分析が授業改善につながっていること。
- ・3年生の多くの生徒に自ら学習に取り組む姿勢の定着が見られる。

レシテーション・スピーチ・ディベートなど各種コンクールへの積極的参加を指導。

11月8日 「スピーチ&レシテーションコンテスト」レシテーション部門

優勝 英語科1年女子

### 3. 成果についての検証

#### (1) 進路決定者数の推移から

学力向上フロンティアハイスクール事業（FHS）、学力向上拠点形成事業の6年間を通じ一貫して大学進学率は向上しており、一貫した指導態勢を確立した成果と考えられる。

#### (2) 保護者・生徒アンケート（資料）の考察から

保護者・生徒アンケートにおいて下記のような肯定的内容を見ることができる。

##### ①全体的傾向

aほとんどの質問に対しては、保護者・生徒とも本校の教育活動に対して肯定的な回答が多い。（肯定的回答の総平均値は生徒で63.1%、保護者で70.7%）

b総じてこの3年間では年度の経過に伴い、肯定的回答が増えている。

② 本校への入学志望度（問1 [入学させたい・したい]）

a 保護者が79.4%、生徒が77.5%といずれも8割近い数値になる。

a 生徒は平成18年度に落ち込んだものの、19年度には盛り返している。

b 保護者は18・19年度と上昇、特に19年度は急上昇している。

→ 我々教職員の諸々の努力により、本校は親が安心して送り出せる高校になりつつあることを意味している。（反面、その分保護者の本校への期待も大きくなっているはず。）

③入学後の満足度（問2 [入学させて・してよかった]）

a 肯定的回答は保護者が92.7%、生徒が81.3%。

b 保護者の方が生徒より満足度が高い。

→ 本校教職員が生徒に対して手を入れていることが保護者に伝わっている。

生徒に対しては、他の質問項目の回答と考え合わせて、さらなる指導も求められる。

4. 課題とその改善

(1) 進路決定者数の推移から

6年間を通じ一貫した進学率の向上が見られるが、少子化による生徒減と近接する須坂市更に長野市への生徒流失による募集定員割れに苦しんでいる。近年は、再募集では高学力層が入学するが、前期・後期選抜の段階で低位層が入学しており学力底上げの努力を続けているが顕著な成果を挙げるには至っていない。キャリア教育を通じての動機付けも進学率の向上という形に表れているが、保護者の意識の変革にまでは至っておらず、経済情勢も手伝って短大や専修学校への進学率に大きな変化は出ていない。

今後は更にキャリア教育の徹底によって生徒の意識向上を図ると共に、保護者への働きかけを強める必要である。

(2) 保護者・生徒アンケート（資料）の考察から

① 本校への入学志望度（問1 [入学させたい・したい]）

生徒20.6%、保護者17.8%は否定的な回答。なかでも、[まったくあてはまらない]は（不本意入学の生徒であろうが、）生徒で3年間平均6.9%、保護者では4.1%。

→ 彼らに対する指導をどうするかも重要な課題である。さらに不本意入学生と転退学者の関係をリサーチする必要もある。

② 授業に関する問い（保護者問5、生徒問4、5、6）

他の設問に比べ肯定的回答が50~60%代とやや低く、否定的回答も30%とやや多い。学力上位層と下位層の開きが大きくなっている中で、授業改善を図っていかなければならない。来年度から65分授業を導入する中で、各教科の授業あり方を今年度までの研究の成果を生かしながら根本的に見直す必要がある。

## 保護者アンケート集計結果

	(%)	肯定的		否定的		5
		1	2	3	4	
		その通り	だいたいその通り	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	
1 中野西高校へ入学させたいと思っていた。	19年度	45.5	32.5	15.0	4.4	2.0
	18年度	37.6	42.4	13.9	3.4	1.0
	17年度	36.6	43.5	12.3	4.5	1.8
	平均	39.9	39.5	13.7	4.1	1.6
	肯定的/否定的	79.4		17.8		
2 中野西高校へ入学させてよかった。	19年度	57.2	34.4	4.0	0.7	3.1
	18年度	52.2	41.5	2.0	0.2	2.9
	17年度	49.6	43.1	3.1	0.9	2.0
	平均	53.0	39.7	3.0	0.6	2.7
	肯定的/否定的	92.7		3.6		
3 学校長の学校運営の方針はわかりやすく保護者に伝わってくる。	19年度	12.8	48.8	15.5	1.8	20.5
	18年度	8.0	41.7	18.5	2.2	27.8
	17年度	7.4	43.1	15.8	3.1	29.9
	平均	9.4	44.5	16.6	2.4	26.1
	肯定的/否定的	53.9		19.0		
4 学校の雰囲気明るく良いとの印象がある。	19年度	40.0	48.3	4.9	0.4	5.7
	18年度	29.3	59.0	3.9	0.2	5.9
	17年度	27.0	57.4	5.1	0.2	8.7
	平均	32.1	54.9	4.6	0.3	6.8
	肯定的/否定的	87.0		4.9		
5 授業はわかりやすいものが多いようだ。	19年度	8.2	45.3	14.3	1.5	30.2
	18年度	4.1	45.6	16.3	0.5	31.0
	17年度	4.0	43.8	17.9	2.2	30.4
	平均	5.4	44.9	16.2	1.4	30.5
	肯定的/否定的	50.3		17.6		
6 授業は進路に対応しているようだ。	19年度	15.7	50.3	7.9	1.3	23.8
	18年度	12.4	58.0	6.8	1.7	19.5
	17年度	14.7	56.9	6.5	2.7	17.9
	平均	14.3	55.1	7.1	1.9	20.4
	肯定的/否定的	69.3		9.0		
7 土曜日の学校開放など授業以外の取組が充実しているようだ。	19年度	25.4	47.7	10.4	1.8	14.1
	18年度	22.9	53.9	6.3	1.0	13.7
	17年度	23.4	56.9	6.5	1.8	9.8
	平均	23.9	52.8	7.7	1.5	12.5
	肯定的/否定的	76.7		9.3		
8 必要な進路情報・アドバイスが与えられているようだ。	19年度	21.4	50.8	11.9	0.7	14.1
	18年度	16.6	59.8	8.8	1.0	12.0
	17年度	15.8	56.0	9.6	2.7	15.0
	平均	17.9	55.5	10.1	1.5	13.7
	肯定的/否定的	73.5		11.6		
9 職員は生徒の様々な悩みについて聞いてくれているようだ。	19年度	19.9	42.8	12.1	0.9	23.4
	18年度	12.2	42.9	8.8	1.7	32.4
	17年度	11.8	40.4	14.7	1.8	30.1
	平均	14.6	42.0	11.9	1.5	28.6
	肯定的/否定的	56.7		13.3		
10 生徒指導について学校の指導は理解できる。	19年度	22.5	53.0	6.0	0.7	17.0
	18年度	25.9	57.3	3.9	0.5	10.7
	17年度	22.1	60.5	3.8	0.9	11.8
	平均	23.5	56.9	4.6	0.7	13.2
	肯定的/否定的	80.4		5.3		
11 我が子のクラスは充実しているようだ。	19年度	34.4	45.5	4.2	0.9	14.6
	18年度	26.8	50.2	5.6	0.7	14.1
	17年度	29.0	43.5	9.8	1.3	15.2
	平均	30.1	46.4	6.5	1.0	14.6
	肯定的/否定的	76.5		7.5		
12 我が子は学校行事に積極的に参加しているようだ。	19年度	49.0	39.7	5.5	1.1	4.2
	18年度	41.0	47.3	6.3	0.2	3.4
	17年度	37.5	49.6	6.5	1.6	3.3
	平均	42.5	45.5	6.1	1.0	3.6
	肯定的/否定的	88.0		7.1		

# 保護者アンケート集計結果

		肯定的		否定的			
		1	2	3	4	5	
		その通り	だいたいその通り	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	わからない	
13	我が子は部活動に積極的に参加しているようだ。	19年度	67.3	13.2	2.6	0.9	0.2
		18年度	56.1	20.7	1.7	0.2	0.0
		17年度	59.2	13.6	2.0	2.2	0.7
		平均	60.9	15.8	2.1	1.1	0.3
		肯定的/否定的	76.7		3.2		
14	学校からの通信類など情報発信は充実している。	19年度	25.2	47.9	8.8	1.3	15.7
		18年度	14.6	56.6	9.8	0.2	16.8
		17年度	19.2	50.0	10.5	1.1	17.9
		平均	19.7	51.5	9.7	0.9	16.8
		肯定的/否定的	71.2		10.6		
15	学校からの通信類は必ず届く。	19年度	31.3	31.8	23.8	8.6	3.8
		18年度	27.6	29.8	27.1	8.5	5.4
		17年度	23.4	34.8	24.6	10.3	6.3
		平均	27.4	32.1	25.2	9.1	5.2
		肯定的/否定的	59.6		34.3		
16	中野西高校は地域に開かれていると思う。	19年度	20.3	47.9	7.1	0.2	23.6
		18年度	17.6	51.5	5.9	0.2	23.2
		17年度	17.4	52.0	6.7	0.4	22.3
		平均	18.4	50.5	6.6	0.3	23.0
		肯定的/否定的	68.9		6.8		
17	中野西高校は地域の信頼を得ている。	19年度	26.3	51.0	4.0	0.2	17.7
		18年度	23.9	50.7	3.2	0.2	19.8
		17年度	23.0	53.6	3.6	0.4	18.3
		平均	24.4	51.8	3.6	0.3	18.6
		肯定的/否定的	76.2		3.9		
18	校舎内外の環境は整備されている。	19年度	11.7	55.6	17.0	2.2	12.4
		18年度	8.5	51.2	18.0	2.9	17.8
		17年度	8.9	51.6	18.5	2.5	17.4
		平均	9.7	52.8	17.8	2.5	15.9
		肯定的/否定的	62.5		20.4		
19	事務室の対応は良い。	19年度	12.8	36.4	4.9	1.8	43.0
		18年度	11.2	38.8	3.7	0.7	43.7
		17年度	8.7	37.5	4.0	1.1	47.3
		平均	10.9	37.6	4.2	1.2	44.7
		肯定的/否定的	48.5		5.4		
20	PTA総会など保護者の意見が集約される場が設定されている。	19年度	15.0	50.8	6.8	0.7	25.8
		18年度	11.7	53.4	7.8	0.2	24.6
		17年度	12.9	52.7	5.8	1.1	26.3
		平均	13.2	52.3	6.8	0.7	25.6
		肯定的/否定的	65.5		7.5		
		総平均値	70.7		11.0		
		※ 総平均値よりも低い値は着色					
21	今年度PTAあるいは学校・学年行事に参加した。(懇談会は除く) (1回は1 2回は2 3回は3 4回以上は4 0回は5)	19年度	32.0	25.8	7.7	6.4	25.4
		18年度	32.2	20.7	12.2	3.4	29.5
		17年度	45.3	19.0	8.3	4.2	1.1
		平均	36.5	21.8	9.4	4.7	18.7
		肯定的/否定的	58.3		14.1		

## II 軽井沢高等学校

### 1. 研究の概要

本校は小規模で生徒の学力差が大きい地域高校であり進路希望も多様である。学力向上・進路保障を目指して生徒の実態に応じた学習指導の研究・実践を積み重ねてきた。本事業では、基礎学力の定着と共にキャリア教育の充実、軽井沢の地域の特色を生かした学びによる学力向上を目指して取り組んできた。

#### (1) キャリア教育の充実

本校では平成13年度からキャリア教育として就業体験学習を導入した。生徒一人ひとりが早い段階での職業意識を高め、進路決定をより確かなもの、より充実したものにすることをねらいとして毎年実施している。

#### (2) 軽井沢の自然を題材にした環境学習

地元軽井沢の豊かな自然や生態系と地域で起きている身近な問題を題材にした体験的な環境学習を全校生徒を対象にして実施してきた。体験型の学習を通じて自らが考え行動し、自己表現できる力を養うことを目指している。この環境学習は地域のNPO法人や大学と連携して実践している。

#### (3) 英語教育・国際文化科充実のための取り組み

- ①国際文化科講演会・大学講座の開催
- ②校外体験学習・合宿の実施
- ③専門科目「地域文化」の実践
- ④学校視察の実施

#### (4) 日常の学習指導の充実

- ①習熟度別集人数講座授業
- ②授業アンケートの実施
- ③落ち着いた学習環境を構築するための職員の意識統一
- ④校内授業公開
- ⑤教育課程研究
- ⑥職員研修会の開催

### 2. 成果

(1) キャリア教育における就業体験学習は8年目となり校内体制も整い、多くの事業所の協力をいただいて毎年実施している。就業体験から学んだこととして生徒が多く挙げているのは①仕事に関する知識・技術の必要性②働くことの厳しさ③あいさつ・言葉遣いの大切さ④人間関係の重要性などである。事前指導や事後指導も充実させ、進路意識高揚につながった。

(2) 本校の特色ある取り組みである環境学習については、大学や研究機関の研究者による講義・指導、またフィールドワークや実習等の体験的学習が大変効果的であった。生徒が興味関心を持って生き生きと学び、生きた学習の機会となった。

(3) 授業アンケートは大別して、生徒自身の学習へ向かう姿勢を問う設問と、授業内容等を問う設問を設定している。どのような教材や教授方法が生徒の興味関心を持たせ、指導に効果的であるか等、このアンケートが実態把握のための資料となり授業改善に役立っている。

### 3. 成果についての検証

(1) 地域のNPO法人、企業・個人、大学等と連携し、生徒の学びの幅を広げてきた。

①キャリア教育については、学校全体で取り組む体制を整え、生徒に一致して必要な指導を行っていることが効果の上だった理由である。また社会人講師を有効活用していること、地域との連携が円滑であることも大きく影響している。

②環境学習に関しては、地域に学びの対象があること、生徒の実態に即した計画的な学習であること、大学・NPO法人との連携が効果的であることが有効な学習に結びついている。

(2) 校内連携を図り、職員が意識統一して一致した指導を行ってきた。

①落ち着いてしっかり学習に取り組む環境をつくるため、生徒が授業を受ける際のマナー面の指導も進路学習指導係重要な役割である。年度当初にマナー、指導方法について全職員で確認し、必要に応じて年度途中においても再確認を行っている。

②学習支援の強化という点で、主に教科担当者、担任が関わり個々の生徒に即した非常にきめ細かい指導を行っている。学習成績不振者には定期テスト前1週間を「テスト前補習」として教科ごとの指導を行い、更にテスト後も教科担当者、必要に応じて学年全体で不振者指導を行い、学習の定着のためきめ細かく一定の手順で指導の手を入れている。

### 4. 課題とその改善

(1) キャリア教育については、学校で学ぶことがいかに社会と結びついているかという点について、教材・指導方法を検討し、更に掘り下げられるようにしたい。

(2) 環境学習で体験的に学んだ内容を、生徒自身の今後にどのように活かしていくのか、見通しを持たせ展望が持てるようにする指導も必要である。そのため表現教育の充実も含めて、学んだことを生きる力に結びつけられるよう仕組んでいかなければならない。

(3) 基礎学力の向上のため、生徒の学習習慣の確立や学習の意識付けを進路指導の観点から工夫して実践することが課題である。また授業改善という点でも教材研究を始め、分かりやすい指導等生徒の実態に即した取り組みが必要である。

成績上位生の指導は進路指導を含め個々の対応となっている場合が多いが、上位生を伸ばす系統立てた指導方法の検討及び生徒が互いに切磋琢磨する環境をつくることも課題である。



### III 駒ヶ根工業高等学校

#### 1. 研究の概要

本校は地域の中核専門高校として工業教育を生涯教育の観点で捉え、「ものづくり」とおして「人づくり」をすることを教育方針の柱としている。この方針を実現するためには柔軟な発想ができ基礎力と実践応用力を備えた工業人を育成し、地域との連携により地域から信頼されることが必須となる。

このような基盤の上に立ち、「ものづくり」を中心とした実践学習と地域との連携を一層推進・発展させるとともに、進学先のグレードアップを図り進路保障をより充実させることを狙いとして研究を進めてきた。本事業で継続して実施してきた項目を中心に、次のとおり報告させていただきたい。

#### 計画1 学校設定科目「ものづくり技術」「産業財産権の基礎」の充実

3科(機械科・電気科・情報技術科)の3年生を対象とし選択科目として開講した。

「ものづくり技術」は10名、「産業財産権の基礎」は8名が受講した。

#### 計画3 ア 資格取得による増加単位認定

現在、生徒から増加単位の申請を受付中である。

イ ジュニアマイスター顕彰制度への挑戦

前期申請でゴールド1名取得し、後期申請でシルバー3名取得。

#### 計画4 進路の手引書作成

「進路ノート」平成20年度版を全生徒へ配布した。

#### 計画5 わかる授業研究

校内研究授業を6月9日(月)、6月12日(木)、6月13日(金)、6月18日(水)、6月23日(月)、7月15日(火)、12月2日(火)、12月9日(火)に実施した。

授業公開を4月26日(土)、6月18日(水)、6月25日(水)、7月2日(水)、7月4日(金)、11月1日(土)、12月24日(水)、1月15日(木)、1月29日(木)に実施した。

#### 計画6 ア 学習合宿

年度末に1年生24名、2年生23名、合計47名の特進コース受講者を対象に実施予定。

イ 特進コースによる4年制大学進学のための選択授業

1年生24名、2年生23名、3年生22名で実施した。3年生の進路は国立4年制大学工学部に2名、私立4年制大学に10名、専門学校7名、就職2名、進学予定1名(センター試験を受験し、国立大学工学部に出願中)である。

ウ 大学進学補習授業

夏休み中に3年生22名を対象に5日間実施した。

#### 計画7 ア 小中学校との連携で「ものづくり教室」開講

7月27日(日)に伊那市西春近南小1・4年親子対象の七宝焼き教室、8月1日(金)に上伊那郡中学校技術家庭科研究会としてレーザー加工機等のものづくり講習会、8月6日(水)に駒ヶ根市赤穂東子どもセンターにてものづくり教室、8月9日(土)に駒ヶ根市赤穂南小2年親子対象の七宝焼き教室、8月10日(日)に信州大学農学部で開催された青少年のための科学の祭典に燃料電池自転車を出展、10月12日(日)に駒ヶ根商工まつりで小学生電子工作教室、10月25日(土)~26日(日)の文化祭「駒工祭」では3年電気科生が小学生電子工作教室を開催、11月9日(日)に福岡地区文化祭でもものづくり教室を開催した。

## イ 大学との連携学習・専門講義

8月29日(金)に諏訪東京理科大学との学習連携として講演会を実施した。

### 計画9 社会人講師の活用(技術系・技能系講演)

7月4日(金)に携帯電話講習会、9月9日(火)に炭焼き職人の原伸介先生の講演会、10月2日(木)に映像制作講習会、12月9日(火)にヘルスサポーター講習会、2月3日(火)にコンピュータグラフィックス講演会を実施した。

### 計画12 ボランティア活動(「パソコンレスキュー隊」・福祉施設)

8月9日(土)～13日(水)の4泊5日で開催された「いなん100km徒歩の旅」、10月にパソコンレスキュー隊が市内住民宅訪問、1月17日(土)に開催された青少年福祉の集い、1月24日(土)～25日(日)に開催された高校生ボランティア研究集会に参加した。

## 2. 成果

- (1) 様々な場面でもものづくりを中心とした実践学習の継続・推進と、学校から産業までを含めた地域連携の強化により、地域からの信頼はより一層深くなった。また広い視野を持った確かな学力の向上と生きる力の育成が図られた。
- (2) 本校は工業の専門高校であるが国立大学への進学希望を持つ生徒が多数入学し、学校見学や大学のイベント等へ積極的に参加している。特進コースは進路実現に向けて着実に根付いている。

## 3. 成果についての検証

地域や地域産業との連携については、工業の専門高校ということもあり地元のテクノネット駒ヶ根を主とした企業連携等を以前から行っている。生徒もこの様な連携事業に参加することを本校の伝統として受け止めており、その意識は学年が上がるほど強くなっている。また、特に小学生ものづくり教室のような地域連携には製作物の準備等相当な日数や根気の要る作業があり大変であるが、生徒達は教える喜びを感じており、ほとんどの生徒が準備段階から楽しんで参加する気質が醸成されている。また、進学においても国立大学を志望する生徒が増加した。

## 4. 課題とその改善

本事業の指定をいただき、工業人を育成する工業高校としての学力向上をいかに目指すかという意識が、広く職員・生徒の間に根付きつつあると思われる。いずれ地域産業界に出て活躍する人物を輩出する責務はあるが、「開かれた学校づくり」の視点では、生徒たちに、より多くの地域社会や行政・高等教育機関との連携が図られた。本校では、上記のように多方面にわたる計画を実施しているが、今後もこのような計画が有機的に実施されていくことが一つの課題といえる。世界的な経済危機の中、地域経済も多大な影響を受けているのが現実である。様々なご協力をいただいた地域の産業・行政等の方々に学校として協力できる部分を模索し、地域とともに歩む工業高校として発展していきたい。

また、特進コースについても、校内外においてかなり定着してきているので、生徒の自己実現のためコース継続と普通教科の一層の充実を図っていきたい。

## IV 飯田高等学校

### 1. 研究の概要

(ア) 学力向上に向け生徒の努力をさらに引き出すために

①家庭学習の基盤作りの取り組み・・・家庭学習重点週間、ドリル学習の実施

②知ることから、探求することへ発展させる学習スタイルの研究

・・・外部講師の活用などを通じ、学びに対する内的動機の掘り起こし

③自らの進路を積極的に考えられる進路ガイダンスの充実

・・・大学および社会人など外部講師による進路ガイダンスとオープンキャンパスへの参加

(イ) 学力形成に向け職員の指導体勢をさらに強力なものとするために

①教材研究と指導法の共有化

・・・自主教材の作成、進路研究会・学校訪問の情報共有、学力分析など

②授業公開、参観をしよう中で教科指導法研究・・・公開授業の実施

③評価方法に関する研究

### 2. 成果

(1)進路学習のモチベーション作り

ア 1年生宿泊研修(1泊2日全員参加): 大学見学、講演、宿舎での学習活動を通して、学習に取り組む心構えを築くのに十分な効果が見られた。

イ 大学オープンキャンパス参加: 興味を深め視野を広げるとともに、進路に対する意識を高め学習への意欲の向上が見られた。

2年生全員 東京方面6大学に分散・全国国公立有名私大相談会参加

1年理数科 京都大学化学研究所「高校生のための化学」参加、京都大学キャンパス見学

ウ 信州大学講座 (144名参加): 信州大学の工学部 医学部医学科 医学部保健学科 教育学部から教官を招聘、教育内容、進路、学生生活等の話を聞く。

エ 名古屋大学対策講座: 数学・英語の予備校講師による講義および名大対策全般

オ 高校生医療体験: 市内病院にて、医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師等の体験

カ 教育実習生を囲む会: 教育実習生21名の専攻別に会場が割り振られ生徒が自主的に出席

キ 進路ガイダンス(社会人講話): 職業研究の一環として一学年で実施。銀行員 公務員 医師 看護師 社会福祉士 マスコミ 研究者 弁護士 旅行社 教師等、11分散会で実施。

ク 進路ガイダンス(大学教授講話): 学部学科研究の一環として二学年で実施。文理4分野、計8分野の学部学科研究を行う。さらに小論文講演会を実施。

(2)家庭学習重点週間の取組

学習習慣づくりとして家庭学習重点週間を実施。学習指導係が推進役となり年に2回(春・秋)実施。さらに面談などを通じ、自らの学習方法を再考する端緒とする。

(3)研究および指導法の共有化

ア 教員の県外の先進校訪問: 訪問校において、変化をもたらしたと考えられる特徴的な取り組みへの経緯と現状について、職員会での報告を行い、情報を共有

イ 予備校講師による研修会(小論文): 小論文の指導方法に関して、職員対象の研修会を実施

ウ 参考図書の利用：各大学入試問題等、資料の充実

エ 自主教材の作成：英語・数学・化学で自主教材作成

オ 校外模試分析・センター分析：本校生徒の学力分析と課題を全職員で共有

### 3. 成果についての検証

#### (1)進路学習のモチベーション作り

主に一年生では、自立した学習習慣の構築のうえに職業という観点から進路学習を進め、二学年では学部学科研究、さらに大学研究へと学習を発展させた。三学年では、それぞれが「何を学びたいのか」「どう生きたいのか」「どのように社会貢献をしたらよいのか」など自分と向き合うなか、学力検証を重ねながら、志望大学を固めていくことができた。

いろいろな形で進路を考える機会を与えることにより、学びに対する内的動機を掘り起こすことができた。(進路関係の情報が適切に提供されているかという問いに 78%がほぼ適切以上と回答)さらに学校行事やクラブ活動などに積極的に参加することからも、切磋琢磨する校風が熟成されている。

#### (2)家庭学習重点週間の取組

				(平日/土日休日)		
	1年	2年	3年	1年	2年	
H17春	122分/209分	129分/182分	141分/187分	H17秋	122分/207分	139分/235分
H18春	174分/365分	165分/336分	210分/430分	H18秋	105分/148分	132分/207分
H19春	194分/398分	140分/309分	184分/362分	H19秋	136分/248分	101分/194分
H20春	172分/213分	171分/208分	151分/164分	H20秋	131分/202分	122分/268分

家庭学習週間を設けることにより、自らの学習姿勢を検証し、自立した学習習慣の構築に繋がってきている。しかし、学年進行に従い、学校生活への慣れからか学習時間の減少がみられる。とくに2学年での「中だるみ」の解消に向け、さらに研究を重ねたい。

#### (3)研究および指導法の共有化

県外の先進校の訪問では、如何に教職員が議論を重ね、汗をかき、それぞれの学校に適した「自分たちのやり方」を組織的に構築してきたかという点について詳細な報告がなされた。訪問した職員だけの宝にすることなく、学校全体で何をどう生かしていくか、研究を重ねたい。

### 4. 課題とその改善

授業の更なる充実に向けた研究が必要である。進度・深度は適正か、予習・復習と連動した授業展開がなされているか、常に検証が必要である。職員相互の授業研究機会は設けているが、それが指導法の研究として具体的な効果を見いだすには至っていないのが現状である。

家庭学習の充実、「中だるみ」をどう克服するかについても更なる研究が必要である。

学力向上に関する諸問題に対し、学校全体で組織的に取り組み、指導の継続、自校のスタイルの確立を目指したい。

## V 松本深志高等学校

### 1. 研究の概要

・生徒が意欲を持って自主的、主体的に学習に取り組む動機付けとなる、学習指導・進路指導の研究を行う。

#### (1) 継続的な学習・生活実態調査の実施

ア 新入生に対して、学力の実態を知るために「スタディーサポート」を実施（毎年4月）

イ 全学年に対し同じ内容の「生活・学習実態調査」を実施（毎年5月上旬）

#### (2) 生徒の学習意欲・進路意識を高めるため、学校独自の進路資料の作成や外部講師の活用

ア 土曜日活用講座「尚学塾」における同窓生の特別講義の実施（毎年2回）

イ 「学習進路の手引き」（各学年、毎年）、「進路のしおり」（毎年、2学年）、合格体験記「黎明」（毎年）、本校卒業生による大学・学部・学科紹介「蒼溟」（隔年）、進学資料「実力テストの%と大学合否の相関」（毎年）の発行

#### (3) 学力向上のための中高連携、PTA・同窓会・地元大学・企業と連携した学力向上・キャリアガイダンスの実施

ア 公開授業（毎年、中学生を含む一般を対象）、公開研究授業（18・20年度、小中学校教員対象）、中学生の一日体験入学（毎年）、「中学と高校の連携についてのアンケート」（毎年、中学校教員対象）等の実施

イ 進路講演会の実施（毎年、各学年ごと）、他校へも呼びかけを行った進路講演（19・20年度）

ウ 夏休みを利用した大学・企業見学の実施（毎年）

エ 信州大学見学会（平成18年度、一年生）、信州大学附属病院実習に参加（毎年）

### 2. 成果

#### (1) 新入生の学力実態について

ア 中学生の学力低下傾向については、実態調査からも明らかである。

イ 学力の低下ばかりではなく、学習に取り組む姿勢、授業を含めた生活態度も変化している。

#### (2) 学校独自の進路資料の作成、外部講師の活用について

ア 土曜日活用講座「尚学塾」における同窓生の特別講義は、毎年多くの講師がいろいろの分野の専門的な講義を行い、生徒のキャリア教育、進路選択に役立っている。

イ 合格体験記「黎明」は、合格した大学・学部・学科を選択した動機、高校入学から合格までの学習方法、クラブ活動との両立などについて書かれており、在校生には大変に有益である。

ウ 本校卒業生による大学・学部・学科紹介「蒼溟」は、学生目から見た大学案内であり、またそれぞれの大学へ進学するために必要な学習方法などがまとめられて、進路選択に活用されている。

#### (3) 中高の連携、外部との連携について

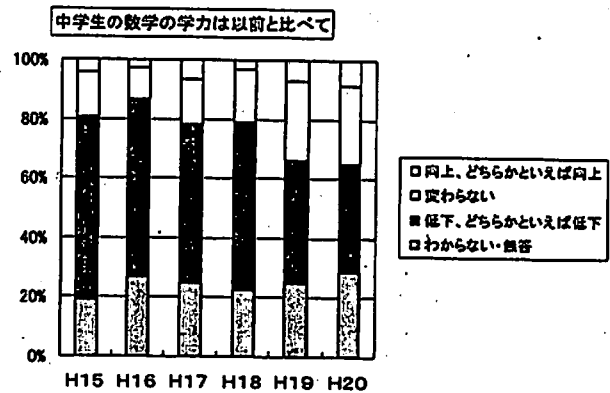
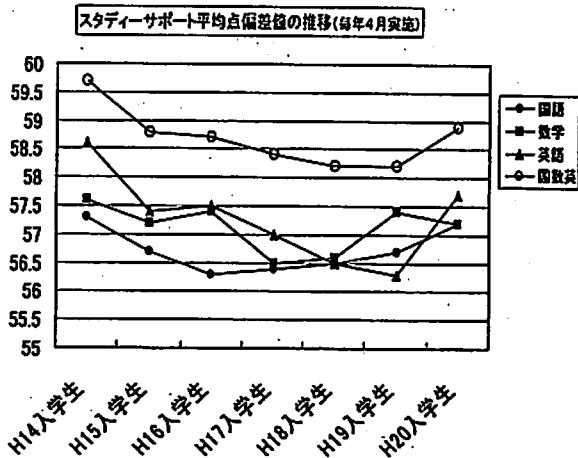
ア 中高の連携については、平成18年度は各教科の先生を対象に、平成20年度は数学科の先生を対象に行った。本校の授業の様子を参観してもらい、本校の現状を知ってもらうとともに、高校で学習するのに必要な学力、中高での学力向上に向けての連携について意見交換ができた。

イ 大学・企業見学は毎年行っているが、生徒の希望を優先し見学場所を精選してきた。いろいろの職業に触れることも大切であるが、自分の希望する職種への見学は、より深い探求が出来る。

ウ 進路講演会については、1年生には高校生活全般に関わる内容、2年生には大学関係者の話、3年生には受験に関わる内容にすることにより、徐々に大学進学に向けてのモチベーションを高めていくように考えた。他校へも呼びかけた進路講演会は、中南信の高校から参加者があった。

### 3. 成果についての検証

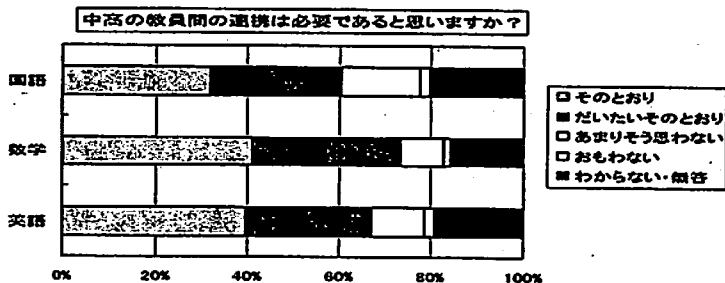
#### (1) 学力、生活実態調査の結果



(11区中学校教員アンケート 毎年12月実施より)

現教育課程の生徒(平成15年度入学生)から、新入生の学力低下の傾向が強くなった。しかし、平成19年度頃より回復の傾向に変わった。これは、中学校教員のアンケート結果からもわかる。

#### (2) 中高の連携について



中学校、高校どちらの先生も、教科間の中高連携の必要性は感じている。また、互いの現状の認識が不足している。

### 4. 課題とその改善

- 中学生の学力や生活態度の変化には、早い時期から注意していたが、適切な対応が出来なかった。従来からの本校の学習指導、進路指導の方針が今後有効であるかさらに検討する必要がある。
- 本校独自の進路資料は、合格体験記・大学紹介ともに大いに活用されている。新しい情報を取り入れてさらに充実させていく必要がある。
- 土曜日活用講座による特別講義は、キャリア教育の上でも有効であった。また、他校へ呼びかけた進路講演会も、同じ地域の高校生の参加を得て一定の成果があった。
- 学力向上に関しての中高連携は、多くの先生に授業を参観してもらい、互いに情報を交換する機会を多く作ることが大切である。中学校の先生からの要望も多い。

## 長野県学力向上推進協議会委員名簿

	氏 名	職	年 度
学識委員	山崎 保寿	信州大学教育学部教授 (会長)	平成18・19・20
	伊藤 稔	信州大学工学部教授 (副会長)	平成18・19・20
	田中 直子	Actfam人材開発研究所所長	平成18・19・20
	土屋 龍一郎	(株)ツチヤ・エンタプライズ取締役社長	平成18・19・20
	寺澤 順子	英会話教室講師 タイ奨学金里親プロジェクト代表	平成18・19・20
	向田 久美子	清泉女学院大学人間学部助教授	平成18・19
学校委員	本藤 毅昭	中野西高等学校教頭	平成19・20
	寺沢 宏芳	中野西高等学校教頭	平成18
	大井 美富子	軽井沢高等学校教頭	平成18・19・20
	茅野 秀樹	駒ヶ根工業高等学校教頭	平成18・19・20
	外山 勇一	飯田高等学校教頭	平成20
	清水 越郎	飯田高等学校教頭	平成19
	今村 智司	飯田高等学校教頭	平成18
	五味 千万人	松本深志高等学校教頭	平成18・19・20
事務局	赤羽 健次	参事兼教学指導課長	平成20
	馬場 澄博	参事兼教学指導課長	平成19
	後藤 正幸	参事兼教学指導課長	平成18
	白鳥 博昭	教学指導課企画幹兼課長補佐	平成19・20
	内山 浩一	教学指導課教育主幹兼高校教育指導係長	平成18・19・20
	六川 雄一	教学指導課高校教育指導係主任指導主事	平成19・20
	櫻井 達雄	教学指導課高校教育指導係主任指導主事	平成18
	小口 俊幸	教学指導課高校教育指導係主任指導主事	平成18
	大日方 貞一	教学指導課義務教育指導係主任指導主事	平成19
	山浦 貞一	教学指導課義務教育指導係主任指導主事	平成18
	花岡 秀樹	教学指導課高校教育指導係指導主事	平成18・19・20
	辻 清隆	教学指導課高校教育指導係指導主事	平成19・20
	両角 文秋	教学指導課高校教育指導係指導主事	平成18

※職は原則として委嘱時のもの